江口忠博委員の総括質疑

○大道寺　信委員長　順位1番、議席番号３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　お疲れさまでございます。

市長以下、関係課長に通告しております質問をさせていただきますが、せんだって、13日をもって山形ディスティネーションキャンペーンが終了しました。３カ月間にわたったキャンペーンでありましたが、その成果のほどはまた後刻にさまざまな数字となって、県のほうの発表も後刻されるということを伝え聞いておりますが、市のほうもその辺のところは、今後、調査等々してくださるものと思います。よろしくお願いいたしますが、この本会議におきまして、この決算の認定の案が議案に上程されているわけですけども、私はこの際に、25年度の成果報告書をもとにしながら、27年、来年度に向けた提案の意味を少し込めながら議論をさせていただこうと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

先日の会計監査報告の中で堀越代表監査委員より、業際という言葉を使われながら、各課の連携の必要性についての言及がございました。私も以前より、さまざまにこの機会を捉えながら、この課の連携ということの必要性を唱えてきたわけですけれども、観光とか産業、そして交流、移住、就労、そして、定住などをキーワードにしたこの活性化策が行政の施策の中ではめじろ押しのときを迎えているわけです。ますますこの各課横断的な取り組みが必要とされているものと考えるわけでありまして、それぞれ各課の事業を見ましても、多くがリンクさせて考えることができるわけです。歳出予算をより効果的に執行しなければならないこの昨今でありますので、庁内整備の考え方を念頭に置きながら、来年度に向けた姿勢にも触れて、これからお伺いしたいと思います。

まず、大項目の１番でありますが、観光振興と移住、定住の促進についてというところで、各課連携の必要性を考えながら、質問をさせていただきます。

観光と産業施策とを明確に位置づけて、観光振興計画の策定を行ったわけでありますが、観光施策の高揚というのをぜひ移住、定住につなげる取り組みとすることが大事だというふうに思っていますが、この中で、まず、戦略的芸術文化事業の成果とその生かし方をどう考えてるかについては、文化生涯学習課長に伺います。

３年前に始まりました、このぼくらの文楽というのがあります。第１回目が終了した折、本会議におきまして、私はこの若者たちの全国規模のイベントへの支援をお願いをいたしました。翌年から、戦略的芸術文化事業という広い意味でのこの芸術活動の支援事業がスタートをしたわけです。当時の実行委員の方々からは、今後、10回、このぼくらの文楽を開催する中にあって、10年間で30人ほどの移住者を目指したいというふうな希望が語られておりました。戦略的と銘打ったこの事業でありますので、当然、その成果のもくろみは考えておられるのだろうという質問も当時の課長、今も同じですけども、させていただきました。担当課として、どのような成果を事業主体者にリクエストをされておられるか、まず、お聞きしたいと思います。

また、事業費の支援にとどまらない、ほかの事業との関連、連携というのをどのように図って、この移住者増につなげようとしているのかということもあわせてお答えいただければと思います。

○大道寺　信委員長　齋藤理喜夫文化生涯学習課長。

○齋藤理喜夫文化生涯学習課長　お答えいたします。

ぼくらの文楽につきましては、古代の丘を中心とする自然環境を生かしながら、若い人たちの感性によって全国各地から誘客、アーティストを含めて招聘をするというふうな事業でございまして、そのプロデュースの力、それから情報の発信力、これについてはこれまでの長井市にはある意味ではなかったものというふうに考えてございます。芸術、あるいは文化活動による地域活性化に対する先駆的な取り組みとして評価をいたし、また、期待をしてるものでございます。

成果、あるいはリクエストについてでございますが、主催者のほうでは10年間での移住者を目標としておりますが、私としては、移住、定住への直接的な成果というよりは、当面は、この事業によって全国各地から若い人たちが集まることを通しまして、地域住民、あるいは市内の団体が文化や暮らしそのものを見直し、地域活性化という共通の目標に取り組む、そういったふうな基盤をつくってくれること、さらに、それが長井市全体に波及をするというふうなことを期待をしてございます。

これまでの取り組みによりまして、全国的にも長井市、あるいは古代の丘、西根地区の認知度は非常に高いものになったのではないかというふうに考えておりますし、地区として一体となった取り組みというふうなものも生まれているというふうに感じてございます。今後ともぼくらの文楽がいわば牽引車となりまして、芸術文化によるまちの活性化が形となってくれることを期待しているものでございます。

２点目の事業支援にとどまらずと、他の事業との連携についてでございますが、特に昨年度でありますが、縄文まつり、それから西根ナーレと題した里の家美術館といったふうの形の地域としての連携が図られております。さらに市街地部分ではまちめぐり美術館、あるいは横丁アートセッションというふうな形での活動が生まれてございます。こういったふうな事業を通しながら、文化協会が主催をしております長井芸術祭なども含めて、市内全体の芸術文化による活性化が図られるというふうなことを期待をしてございます。今後の展望としては、そういったふうな連携を図る形で、芸術文化都市としての実績を積み重ねていく方策を検討していきたいというふうに考えてございます。

さらに、移住、定住との関連でございますが、芸術文化サイドからの移住、定住を考える視点としては、３つ、あるいは４つぐらいの点を考えてございます。

まず１つは、創作意欲を駆り立てるような環境、特に自然、あるいは歴史的な部分を含めてかと思いますが、そういったふうな環境があるというふうな場所においては、現地で制作をするというふうな、現地で創作活動を行うというふうな可能性があるのでないかというふうな点が１点。

それから、今年度から着任をしております地域おこし協力隊からのお話なんかを伺いますと、現在、特に若手の芸術家においては、創作する場所の確保、あるいは発表の機会を得るということはなかなか難しいというふうな、容易ではないというふうなお話を聞いております。こういった環境が整えられれば、滞在、あるいは、こちらのほうに住むというふうな可能性もあるのでないかというふうな点。

それからもう一つは、地元の人、特にお年寄りなどとの交流が人間的な深い共感を、与えといいますか、受けとめ、それがリピーター、あるいは定住といったものにつながる可能性があるというふうなことをこの間、感じてございます。

こういったふうなことを前提としながら、あるいは、メリットとしながら、これから長井市

全体がアートのまちというふうなものになって、長井市で制作をする、あるいは発表するというふうなことが芸術家、作家としてのステップ、あるいはステータスになるような基盤をつくりながら、さらに地元の人との共感をベースとして、滞在しながら創作活動を行うと。さらに定住へとつながるような方向性を求めていく必要があると。求めていきたいというふうに考えてございます。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ありがとうございました。

この戦略的芸術文化事業ですが、これは予算100万円ということでありましたけども、これは上限が100万円ということであって、いつもいつも満額ということではないだろうなというふうな思いはあるんですけども、２点伺います。

これは、事業費の見積書の提出とかを受けた上で、この補助を決定されているのかということと、もう一つ、例えば、今、まちめぐり美術館との連携とかいうこともおっしゃいましたけども、これは企画調整課のほうでの心のまちづくり基金での助成ということなわけですけども、そうしますと、この戦略的というふうな言葉の意味合いというのが、意味合いというか、意味がまだぴんとこないのですが、あえて戦略的というふうに銘打ってるところの深いところの意味というのはどんなふうにイメージしたらいいのか、少し教えていただければと思います。

○大道寺　信委員長　齋藤理喜夫文化生涯学習課長。

○齋藤理喜夫文化生涯学習課長　お答えいたします。

補助額の決定につきましては、事業計画書を出していただいて、それを確認をしながら事業費のほうを決定、補助金のほうを決定してるというふうな手続をとってございます。

それから、戦略的という、意味合いといいますか、についてでございますが、長井市の文化活動の推進、外に対するアピールの度合いといったふうなものも含めて、そこの牽引事業となるだろうというふうなものを期待したいというふうなことで戦略的というふうな名称を使わせていただいております。文化活動、あるいは芸術活動というのは、かなり幅が広い分野があります。音楽から、あるいは生け花、あるいは小学校等まで含めてあるわけなんですが、そういったふうな多様な種類の中で、長井市として今後に展開できる誘客、それから移住、定住等も含めての戦略として重要と考えられるものを支援をしていきたいというふうなことで、この名称を使ったところでございます。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　まだちょっとそんなにしっくり私は理解はできないんですが、結局、最終的には、移住、定住にまでこれがつながれば、よりベターだと、ベストな状況だというふうなこととして理解をするわけですけども、先ほどおっしゃった創作意欲を駆り立てるような環境であるとか、若手のそういった創作活動をしてらっしゃる方は、創作する現場とか、あるいは発表する場がないという現状もよく理解できます。私もそうでありましたし、私の仲間も、あるいは私の後輩たちもそういう状況がありますが、ただ、こういった創作活動をしている方は、その場所にいなければいけないという必然性はないのです。自分が創作して都合がいいところというのは全国各地にあるもんですから、その全国の方々と触れ合った土地、人と触れ合った場所にまずはきっかけとして行くんですが、そこにずっといる保証はないということもぜひご理解していただきたいんです。地域があって創作活動があるのではなくて、本来的には、創作意欲というのは、現場がなくても、全国、あるいは全世界どこでも創作活動ができるというふうなスタンスで大体物づくりの方、芸術家の方はいらっしゃるものですから、その方が来たか

ら安泰だということはないということもぜひご理解していただければなと思いますが、このぼくらの文楽以外にも、今、課長のほうがおっしゃられたように、横丁アートであるとか、何でしたっけ、まちめぐり美術館であるとか、最近は、昨年から西根ナーレという新しい取り組みもスタートしました。ここの長井にいろんな方々がアートを楽しみに、創作家と触れ合いを楽しみに長井に来てくださってる方はたくさん、多くなっているような印象は受けますが、この訪れた方々に対して、ガイドといいましょうか、長井を案内してくださったり、長井のいいところを本当にＰＲしてくださるような方々がいらっしゃるわけです。黒獅子の里案内人という方々でありますけども、この方々も多分、いつかは長井にもっと足を運んで、長井に住んでくださいねなんていうことも一生懸命ＰＲされているのかなと思うわけでありますが、そういった方々の言葉一つ一つが長井への定住を、移住を促すきっかけにもなろうというふうに考えているわけですが、ここで観光ガイド事業の具体的な進展策をどのように考えてるかということをまず観光振興課長に伺いたいと思います。

歳出予算の具体的なこの使途ですが、10万円という額が２つ並んでおったりしますけども、ちょっともう少し具体的にこの予算の使途について教えていただければと思います。

また、この長井市のことをよく知るこのガイドさんの皆さん方から実際、来訪者の方々と触れ合った結果、どのような反応があったのかとか、あとは、どういう観光客の方々からのリクエストがあったのかということも多分聴取されていると思いますが、その辺のこともぜひ披瀝しながら、お答えいただければと思います。

○大道寺　信委員長　鈴木広弥観光振興課長。

○鈴木広弥観光振興課長　観光ガイドにつきましては、観光ボランティアガイド、「ながい黒獅子の里案内人」の会にお願いして実施しております。ガイドの内容につきましては、４月のさくら回廊に始まりまして、５月の白つつじまつり、それから黒獅子まつり、それから、６月から７月にかけてのあやめまつり、それぞれのイベント等で案内していただいております。

あと、近年はこれに加えて、まち歩きのガイドも務めていただいております。まち歩きのほうのガイドは主に２つありまして、１つは駅からハイキング、２つ目はおさんぽ定期便でございます。駅からハイキングは、ＪＲ東日本の日帰りのハイキングのイベントでございます。駅からハイキングのほうですけれども、気軽に参加できまして、駅長のお勧めのポイントを味わいながら、とっておきのハイキングコースを歩くというふうなやつでございます。

２つ目のおさんぽ定期便につきましては、これはながい黒獅子の里案内人の独自企画でございまして、去年からスタートしております。

駅からハイキングにつきましても、おさんぽ定期便にしましても、従前ですと、日曜日１日イベントをしてというふうなことが多かったわけですけども、去年からは、１週間から２週間ほどの期間を設定しまして、継続的にこれをやろうというふうなことでやっております。１回でたくさんの人を集めるよりも、長期間にわたって開催していったほうがまちの活性化により役立つだろうという判断からでございます。

観光客の皆さんからは、ガイドの方に対して礼状が届くケースも非常に多くございまして、お客様が満足して帰っていらっしゃるんだなというふうなこと、それから、当方のガイドさんのレベルが非常に高い状態にあるんだなというのがわかります。

ガイドの実績につきましては、平成22年に最高でございまして、年間7,002人でございました。その後、大震災で激減しまして、平成23年に4,088人、それから24年に4,789人、去年の平成25年は5,172人と回復基調にはあるんですけ

れども、震災前のレベルには達しておらないというふうな状況でございます。

ながい黒獅子の里案内人の会に対しては、ガイドしていただいた謝礼としてお金を支出しておるわけでございますけれども、会ではこれを山形日和のＴシャツを買ったり、あるいはのぼりを買ったりと、それから、ボランティア保険の保険料の支出、それから、ガイド時の昼食代などに充てて支出しております。

ガイドの皆さんの声としましては、ことしの２月にかわと道の駅の整備に関する提案をいただいております。かわと道の駅に黒獅子を展示してはどうかというふうなこと。それから、馬肉の食文化について経緯を表示したらどうかというふうなこと。それから、川沿いの小道を整備したらいいんじゃないかというふうなこと。それから、かわと道の駅には案内できる人が駐在して、おしゃべりなどが楽しめるコミュニケーションの場が必要であるというふうなご提言などをいただいております。

今後の方向性につきましては、まち歩きに今後も力を入れて、町なかに観光客の皆さんに歩いていただいて、商店街に何がしかのお金が落ちて、まちの活性化につながっていけばというふうなことを考えております。

また、ことしはまち歩きのお客様がふえた関係で、ガイドの皆さんの負担がふえております。そこで、ガイドの方の数を何とかふやしまして、１人当たりの負担を何とか減らせないかなというふうなことも今後の対策として考えなきゃいけないだろうというふうなことも考えております。

いずれにしましても、観光振興が即定住というふうにつながることはないわけですけれども、長井のまちを知っていただいて、長井に好印象を持っていただくことが定住の第一歩となるわけでございますので、長期的視野で見ますと、定住促進の第一歩というふうなことにつながるかと思いますので、その辺を向けて頑張っていきたいと思っているところでございます。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ありがとうございます。

町なかガイド謝礼10万円の支出がございますが、これ10万円という額はどこから出てきたものなのか、ちょっとお尋ねしたいんですが。

それから、今、新しいガイドさんの養成が必要であると。将来的には、現在の数と、あとは、特に28年、観光交流センターがオープンすれば、まだまだその需要というのはふえてくるんだろうと思いますが、何人ぐらいをめどに、どんなふうな手だてでガイド養成をされるか、お考え、今、お持ちであれば、ぜひお聞かせください。

○大道寺　信委員長　鈴木広弥観光振興課長。

○鈴木広弥観光振興課長　具体的な数字と言われますと、ちょっと私の口からはあれなんですが、ただ、去年あたりからガイドの募集をしておりまして、去年までは20人ほどが会員だったんですが、10人ほどふえまして、30人弱ぐらいに会員がちょっと今回、ふえております。こういった方々の力を得てやっていきたいと思っておりますけども、ただ、新しく入った方はまだ実践経験が不足しているもんですから、そういった方々の養成というのが大事になってくるかなと思っております。

あと、10万円の経過でございますが、多分最初に切りのいい数字、10ということでなっただけかなと。その後、ずっと据え置きで10ということで、これまで来てるのかなと思っております。

ガイドの皆さんからは、そもそもがボランティア活動というのがそもそもその精神でやってらっしゃるもんですから、それを上げてくれというのは、特にそれはないと思ってます。ただ、今後、活動がいろいろ多角化して多くなってきますので、助成金についてはこちらのほうで逆に配慮が必要になってくるのかなということを

考えておりますけども、現段階はこのままでしばらく行きたいと思っております。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ちょっと教えてください。

ガイドさんが身につけてらっしゃるはっぴであるとか、特にさくら回廊のときは、はなさかじいさんのような、ああいったコスチュームというのはどこから出てるんでしたっけ。

○大道寺　信委員長　鈴木広弥観光振興課長。

○鈴木広弥観光振興課長　基本的に、そういったやつにつきましては会で支出しております。会のお金を使って、個人出費はないようにして支出しております。今回、山形日和のＴシャツを購入しますけれども、それも会員全員にそれを配付して、それを着用して案内していただくというふうなことでやっております。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ということは、毎年お支払いしてるガイドの謝礼10万円、ここから支出されてるということですか。

○大道寺　信委員長　鈴木広弥観光振興課長。

○鈴木広弥観光振興課長　ガイドさんの皆さんにつきましては、いろんな市からの収益のほか、観光のガイドをしていただいたときの収益もございます。それらを会の収入源として、それをしてると。ボランティアガイドの人が収益を得るというのは、ガイドが収入をもらうというのはちょっとおかしいようですけども、案内したとき、個人客からお金をもらうということは原則ないんですけれども、エージェントの方を案内する方がございます。ひどいエージェントの方ですと、ボランティアガイドに皆、案内をさせて、観光収入はばっちりもらうということを企画する場合もあるわけですけども、一応当方としましては、１時間当たり1,000円とか、例えばそういった些少の額ですけれども、そういった額を設定して、２時間、今回したら、例えば2,000円の代金をエージェントの方に支払っていただくというふうなことで、若干ですが、そういった収入もございます。そういったトータルの収入をもとに、会の活動をいろいろ、さまざまやっていくということになっております。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　わかりました。

そうしますと、いずれにしても、案内人の方々がみずからいろんなものを、そういったものを、お金を原資が積み立て、積み立てというか、ストックされたものから自分たちが購入してコスチューム等々をつくってるということと理解するわけですが、そうしますと、やっぱりこのガイドの方々、だんだん数がふえてきているということもお聞きしますと、地域の中では本当になくてはならない方々になってくることは、これは必至でありましょうし、そうしますと、より効果的に旅行者の方々によりよいガイドをしていただくためには、さまざまな経費もかかると思いますが、ぜひその辺はガイドさんの方々と相談もされながら、目的は観光客の方々に喜んでいただけるガイド養成ということでありましょうから、それに係る経費というのももう少し、何か紋切り型の10万円、毎年毎年なんていうことではなくて、必要に応じて、そこのところは予算措置もしていただければと思うわけです。これは結局、交流人口がふえて、リピーターもふえて、そして、まちの方々と親しくなる旅行者の方もふえてくることになってきますと、やがて、やっぱり私はこだわるようですが、こちらに移住してもらいたいというのが私の大きな希望でもあるんですが、そこで、この定住、移住というのをより促進させるために実施している事業が企画調整課のほうにはあるわけですけれども、このふるさと交流定住事業の今後の計画をどう描くのかというところについて企画調整課長にお伺いしますが、現在、この長井市の移住、定住の体験ハウスというのがございますが、この利用者はどのような方々

であるのか。あとは、その方々からどのような感想が述べられているかということですね。まず、そこについてちょっと伺いたいと思います。

○大道寺　信委員長　谷澤秀一企画調整課長。

○谷澤秀一企画調整課長　長井市の移住、定住の体験ハウスですが、まず、目的としては、長井での生活を実際に体験していただこうと、田舎暮らしを体験していただくということでございます。

実績としては、25年度、７組25名の利用がありまして、今年度はこれまで６組22名、さらに９月以降には２組４名の予約が入っております。

そこでいただいた感想ですが、知らない土地に移住することにはすごく強い決心が要ることなので、実際に体験できるというのは非常によいということ。あと、自然に恵まれている土地であるが、都市機能も十分ある地域というふうに感じたと。あと、身近に住民の方と触れ合いができるような機会があればもっとよいというふうなことなどをいただいてます。

その中で移住希望者というのが実際出てきておりまして、ことしの１月でしたが、東京で移住交流イベントをしたときに、長井のほうへ移住したいという具体的な相談がございました。神奈川県の家族でございますが、お子様もいらっしゃいます。実際にことしの８月に４泊５日でこの体験ハウスを活用されまして、その際に市内の保育施設であるとか小学校の教育環境などを見学されて、さらに、ちょうど水まつりのイベントの時期でしたので、そういうイベントなども体験されてまいりました。自然に囲まれた環境で、子供を伸び伸びと育てるのに適していると。あるいは、移住後の生活などもイメージすることができて、長井へ移住する考えがより強まったというふうな感想などもいただいております。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ありがとうございます。

ぼくらの文楽の第１回目のとき、２回目でしたっけ、市のほうで職員が来場者に対してアンケートをお願いしていたということがありましたけども、その成果とは言えないかもしれませんけども、長井が移住者獲得に向けてさまざま、触手を伸ばしている中にあって、少し成果が見え始めたということと考えます。大変うれしいことであるなと思いますが、昨年、定住に向けたこの冊子「ごんざい」というのをつくりました。低予算だったということは承知しておりますが、500部、これをつくられて、定住に向けた、定住の希望がある方、あるいは、定住をそそるというふうな意味合いも持って、いろいろな各方面に配布したんだと思いますが、どんなところにこの「ごんざい」という冊子を配られたのか、少しお聞きしたいと思うんです。

これから、この「ごんざい」という冊子をまだ増刷、頒布する考えがおありなのか、その辺もあわせてちょっとお答えください。

○大道寺　信委員長　谷澤秀一企画調整課長。

○谷澤秀一企画調整課長　昨年つくりました「ごんざい」の冊子ですが、「ごんざい2014」というふうに題してまして500部、当初つくりました。

頒布の状況としては、体験ハウスにまず入ってくれた方、あと、東京の関係先ということで、東京事務所であるとか、あと、ふるさと回帰支援センターというところなどありまして、そちらへ置いております。それから、長井へ転入してこられた方、長井の人と暮らしの手引というふうな意味合いもあって、転入者にもお配りしてます。それから、重要事業の要望をしているときに、長井市の紹介というふうなことで一緒に配らせていただいております。

非常に好評なもんですから、残りがわずかとなってまいりまして、ほかの事業、具体的には雇用創造協議会のほうと連携しまして、700部増刷いたしました。雇用創造協議会のほうでは、

商品開発を行ったときに、売り込み用として、その長井のＰＲ冊子として、それを使っていくということに考えられております。

今後、首都圏でのそういった移住交流のイベントなども予定ありますので、そういったところで配布して反応を見たいなというふうに思っております。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ありがとうございます。

成果報告書の中、12ページですけども、改善策というところですね。移住コンシェルジュという言葉が出てきました。ちょっと舌をかみそうなんでありますが、これには、訪れる方に地域の歴史や文化、食などを細やかに案内する移住コンシェルジュの育成が求められるというふうな課題ですね、が述べられておりますが、移住コンシェルジュというのは具体的にどういうふうにイメージをすればよろしいのですか。

○大道寺　信委員長　谷澤秀一企画調整課長。

○谷澤秀一企画調整課長　先ほど、体験ハウスを利用された方からの感想にもあったんですが、この長井市を知るために、やっぱり地域の人と少し話をしていきたい。あるいは、この長井市に住むというふうに考えたときに、その居住であるとか仕事をどうするかとか、あるいは教育とか、そういったさまざまなものに対して総合的に案内をしていただけるような仕組みがあればいいなというふうな話などもあります。コンシェルジュという片仮名の言葉よりも、総合案内人みたいな感じで捉えていただければいいかなと思ってます。この長井の歴史とか文化、あるいは郷土料理であるとか、そういったことを案内していただく。あるいは、その居住、仕事、教育、環境、そういったところを案内していただけるような方、これを今後、ぜひ設置に向けて検討したいなというふうに思っておるところです。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　それ、ワンストップの窓口というか、いつも求められてることではありますので、そこのところは大事な部分だと思いますが、先ほど申し上げた黒獅子の里案内人の方々の中にも、多分そういったことにたけた方がいらっしゃるのかなというふうにも思えたりするわけです。外部からの人ということではもちろんないんでありましょうが、地域で頑張っておられる案内人の方々のキャラクターなども十分生かせるのかなというふうな気もしますので、その辺は今後、観光振興のほうとも検討していただければというふうに思います。

先ほど、東京事務所のほうにも「ごんざい」の冊子を置いて、広く首都圏の方々にも長井のよさを知ってもらおうということの取り組みをされてるというふうに伺ったわけですが、このシティプロモーション事業を展開しています東京事務所の関連で、ちょっと市長のほうにお聞きしたいと思いますが、長井のふるさと親善大使事業がありますけども、これ企画調整課長でもいいんですが、目指すものとしては、このところは首都圏中心としたネットワークの構築ということであるんだろうと思います。その先にあるというものは、交流人口の増大ということとともに、もちろん地域経済の活性化もあるんでありますが、やっぱり移住、定住者の増加であってほしいと私は思っているんですけども、そのためのＰＲを大使の方々に一生懸命してもらってるというふうに私は理解をするものでありますが、さまざま大使の方々からは、長井への市政全般に対するアイデアを述べていただいたり、さまざまな形での提言をしていただいてるのかなというふうな思いもありますが、この大使の方々から長井にどんなふうな要望というか、進言があるのか、あったのか。あれば、少し例なども挙げてちょっとお示ししていただければと思いますが、これ市長でよろしいですか。

○大道寺　信委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　お答えいたします。

ふるさとしあわせ応援大使を設置させていただいて３年目なわけでございますが、目的というのはいろいろございまして、特に一番大きい目的というのは、企業誘致等々で、なかなかその情報を入手できなかったと。あるいは、首都圏、あるいは中京、関西圏で活躍されてる方からさまざまな企業の情報なり、あるいは、培われていらっしゃる人脈を通じて、長井に対し、さまざまなご協力をいただきたいということがまず第１点でございます。

それから、大部分の方は長井出身でありますので、外から見た長井の生かし方ということでのいろいろアドバイスを頂戴したいと。移住、定住というところの部分は当初は余り期待しておりませんでした。

あと、３点目の部分については、地域のさまざまな農産、特産物、食品加工等々、こういったものを有利に販売するためのそういったところのご紹介なり、あるいは、直接勧めていただいたりと、そういったことで考えておりましたが、やはりなかなか電話とか、あるいはメール等々でのやりとりだけでは円滑に進まないということで、年１回お越しいただいたり、こちらから年１回ということで、２回程度でした、去年、おととしまでは。それが、ことしからは東京事務所を開設したことによりまして、しかも、シティプロモーション事業ということで、シティマネジャーとコーディネーターの方を通じて、さらに頻繁に、あるいは、テーマごとに分かれていただいて具体的なご提言をいただくということを期待しております。

江口委員からは、具体的な何かございましたかということですが、例えば中京、名古屋のほう、愛知県の方もお二人いらっしゃいますが、それは地元企業の受注拡大であったり、あるいは、企業誘致というところまではなかなか結びつかないわけですが、そういったところの有益な情報を定期的にいただいております。

それと、この間の７月31日の東京事務所開設の際、１時間半ほどいろいろ懇談をしたんですが、その際いただいたものとしては、例えば長井の中小・零細企業ではありますが、基盤技術を持った企業がたくさん集積されてると。そこと大田区の日本一集積された中小企業のここを結ぶための、この間も講演をしていただきましたが、下町のボブスレーというプロジェクトがありますけども、それを生かすには、ぜひ県のほうに長井市が働きかけて、冬季オリンピックを山形に誘致したらいいんじゃないかと。それは山形だけでだめだとしたら、仙台含めた、そういったことをすることによってボブスレーというのは生きてくるし、それを長井でつくることもできるんじゃないかというようなご提言とか、あるいは、長井の売り込みの仕方ですね。ＰＲというのはどこの市町村、1,800の自治体が全部やってるわけですから、その中でいかに勝ち抜くか、いかに注目を浴びるかというのはかなり難しいぞと。それに対しての具体的なこういうやり方がいい、ああいうやり方がいいって、それぞれのプロの方がいらっしゃるわけですから、そういったご提言。あとは、例えば、東京の観光バスがかなりあるんですけど、バスのほうにはいろいろそういった仕事の関係でいろんなネットワーク持ってると。その中で、あやめの時期だけでもいいから、例えば１カ月、ラッピングバスとか、場合によっては１年通じてラッピングバスみたいな、長井ということでやると、これすごいＰＲですよと。そういったことをやったらいいんじゃないかとか、具体的なことをいただいておりますが、そういったことをこれから詰める、ようやく段階に来たというふうに思っております。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　いろいろなアイデア等々を言っていただくのは非常にありがたいことで

ありますが、それを実施できるか。財政のこともいろいろありますので、より効果的な策を選ばなければいけないわけですけども、事業評価、成果報告書の中に、12ページですね、今おっしゃってくださったふるさと親善大使事業の一番下のほうなんですが、さまざま市が抱えている課題に対して、大使の方々もいろんな提言をしてくださってるということは十分わかりますが、この取り組み、今後、具体的に、より効果的な取り組みを行うための庁内の体制整備が求められるというふうな課題に言及されておりますが、そこについてちょっと市長に最後にお伺いしたいわけですけども、どういうふうにこれ、以前から各課横断的に事業に取り組んで成果を効果的に上げなきゃいけないということは、課題としてこれあるわけですけども、どんなふうなイメージでこれ、あれですか、庁内整備をされるというか、したいというふうに思ってらっしゃるのか。ご所見あれば、お伺いしたいと思います。

○大道寺　信委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　代表監査からもご指摘いただきました業際という部分については、私ども、行革を経験してきましたので、例えば予算的に、国の省庁みたいにダブると、同じような予算を農林で持っておったり、企画で持っておったり、観光で持っておったりと、こういったことはありません。これ全部、財政課のほうで調整しますので、そういった部分はないと。ただし、やっぱり代表監査が、監査委員の方がおっしゃるように、例えば、これあんまり例を挙げると悪いのかもしれませんけども、子育て支援なんかは非常に難しいと。これ何が難しいかというと、物理的に難しいんですね。教育委員会が清水町にあって、そして、健康課がままの上の保健センターにあって、そして福祉と市民課が、そして、子育て支援課が本庁にあってということで、プロジェクトチームでやっぱりやってるわけなんですね。これは定住なんかも、移住、定住もそうです。プロジェクトのチームのリーダーが、主管課がそれをやっていくわけなんですが、やっぱり一つ一つのテーマでプロジェクトをつくり過ぎますと、もう混乱すると。１人で、課長が全部するわけじゃなくて、やっぱり担当の係長とか主査とかがやるわけですね、リーダーが補佐になる場合もあるんでしょうけども。そういったところの部分でなかなか調整し切れない部分というのは多分にありまして、ここは以前から議会のほうにもお願いしております、やっぱり組織機構の改革を考えていかなきゃいけないんじゃないかと。少なくとも１つか２カ所ぐらいの庁舎ですと、よっぽどいいんですが、もう７カ所に分かれてしまってますんで、これを何とかカバーする意味でも、苦しいんですが、そういったところで、機構改革である程度こういった不都合な部分を少なくしていこうということをまず考えております。

あとは、やっぱりプロジェクトをつくっていくしかないんだろうというふうに思います。以上であります。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　きょうの私の質問は、もう観光に絡めながら、移住、定住というところまでを捉えた全体的な流れにさせていただいたわけですけども、28年からスタートする観光プラットホーム、正式にいうと何でしたっけ、観光何とかプラットホームでしたよね。観光プラットホームでいいんですか。その辺をやっぱりきちっと構築するためにも、庁内整備はぜひ必要だとは思います。

例えば、先ほどから申し上げてるように、観光振興課が所管している案内人の方々を活用して、企画調整課が持っている事業とダブらせる、つなげていくなんていうときには、じゃあ、誰がそれを上からコーディネートしながら、しっかりその成果も考えた事業執行をするかという

ところですね。監督してなきゃいけないわけですよね。各課ばらばらに成果報告が上がってくるということは議会としても多分望んでないと思うので、まとまった成果として、こういうふうなことが上がりましたということは、これは各課ばらばらでなくて、もうちょっと、プロジェクトになるかどうかわかりませんけども、そういったことをイメージしながら、ぜひ組織の改革まで、なるべく時間を置かずにこれは取り組んでいかなければいけない課題だろうなと思いますので、期待を申し上げておきます。

時間もなくなってきましたが、２番目のこの命のバトン事業について最後に質問させていただきます。

救急医療情報キット、この配布事業というのは、居宅内においての非常時にどう対応するかということだと思うんですが、これは高齢化の進展によりまして、大体元気でこれからうちの中でも外でも過ごされる方が多くなってくることが十分想定される中にありましては、外でもしご高齢の方が何かあったときに、どう対応するかということも十分考えておかなければいけないわけです。今、やってらっしゃる命のバトン事業の実態というのをぜひ健康課長にまずお伺いしてから、それから、外出時における対応についても考えておられることがあれば、ぜひお聞きしたいと思います。お願いします。

○大道寺　信委員長　梅津明夫健康課長。

○梅津明夫健康課長　お答えいたします。

命のバトン事業の実態についてということでございますが、これについては、先ほどお話しいただいたように、救急医療の情報を入れたキットを配布するという事業ということで、個人の医療情報や緊急連絡先などを記載した用紙をボトルに入れて冷蔵庫内に置いていただいて、冷蔵庫の扉にその存在を示すマグネットシールを張っていただくことで、非常時の対応ができるようにするというものでございます。現実はこういうもので、こちらに事業を示すシールが張ってありまして、あと、名前を記入する場所、それから、中に先ほど申し上げた情報を記入した用紙を入れておいていただくというふうなことです。冷蔵庫のほうには、中にこのバトンを入れてますよというふうなことを示すマグネットシールを実際に張っていただくというふうなものになっております。

平成23年度から65歳以上の単身世帯や65歳以上の方だけの世帯に、民生委員の方のご協力をいただいて配布を始めたものです。それで、昨年度からは、日中に家族が出かけてしまって、お一人になるというふうな方、75歳以上の方については、希望される方に新たに配布をするというふうなことで始めております。

配布済みの累計につきましては、９月のもう最新の時点でございますが、2,075世帯、人数的には3,382人というふうになっております。

救急搬送の際の情報活用の実績が、消防署さんのほうから実績報告があるんですが、平成25年度で配布済みの、この持ってる方を対象とした救急搬送は84件あったそうです。そのうち、この中身を参照したものが18件というふうなことで報告をいただいているところです。

活用件数が少ないというふうに思われるかもしれませんけども、活用されなかった事例としては、本人とか家族からの聞き取りが可能であったことによるものがほとんどということであります。ただ、やはりその中には、バトンそのものが冷蔵庫になかったりと、置いてなかったとか、あるいは、少し情報が古くなってしまっていて、ちょっと活用ができなかったという事例も数件あったというふうなことで、今後はその情報の更新作業とか設置場所の確認の点検というものが必要とされているようでございます。先ほど申し上げた民生委員の方にもご協力をいただきながら、そういった点も進めていきたいというふうに考えております。

委員おっしゃるように、家庭やうちの外回りぐらいにいらっしゃるときはこれを活用できるわけなんですが、外出先というふうな場所の想定をしている事業ではありませんので、そこはちょっと想定をしていない中身です。ただ、大体の方、出かけるときは免許証だったり身分証明書だったり、各種カードとか、そういったものを携行されているのではないかなというふうに考えます。そういった点で、全く誰だかわからないというふうなことはめったにないのではないかなというふうには考えておりますが、この命のバトンそのものはやっぱり外出先を想定したものではなかったと思います。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ありがとうございます。

このバトン自体は外出時を想定してないということはわかります。大きいですし、それを持ってということはもちろん想定してないのは十分理解できますけども、実際、これから高齢者も含めて、例えば認知症を患われてる方なども当然出てこられる回数はふえてくるでありましょうし、特に日中、夜間に限らずです。そういったことを想定しますと、ぜひそれへの対応ということも同時に考えていっていただきたいなと思うわけですが、市長にお伺いします。

大田区においては、この見守りキーホルダーという事業をやっているそうでありますね。これ包括支援センター各所で実施されておりまして、支援センターのほうで、その方の既往歴であるとか飲んでいるお薬とか、さまざまなことを、情報を一括されてまして、かかりつけ医らとも連携もとれるような状況になっているんだそうですが、数字を書いたキーホルダーらしいんですが、それをいろんなところに身につけておく。つえにつけたり、体に身につけたり、いろんなものに身につけておくことによって、万が一のときには、その番号を照会することで、誰なのか、どういう方なのかということができて、すぐ対応ができるということをやってらっしゃるんだそうですが、長井は当然、大田区と非常に深い交流をされてますので、そういった大田区の事例なども参考にされて、ぜひ、あんまりお金かかんないそうですが、ネットワークさえできてれば、キーホルダー自体はお金かからないということでありますが、その辺をぜひ参考にして、高齢者の方々中心にした、その外出時の突発的な事態に対応するためのサービスというのを考えてもらいたいと思うんですが、いかがでしょうか、市長。

○大道寺　信委員長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　お答えいたします。

江口委員おっしゃる見守りキーホルダー、大田区でなさってるということで、命のバトンのほうも大田区さんのほうからいろいろ情報をいただいて始めた事業ですので、キーホルダーについてもぜひ検討していきたいと思いますが、ただ、お聞きしますと、平日の日中しか、これは機能してないそうなんですね。お名前とか個人情報なので、キーホルダーには書いてないと。番号なんですね。そうすると、それをセンターに問い合わせて、例えば病院、救急とか、それで、その方のデータベースを聞くわけですよね。ですから、そういったデータベースの個人情報の整備と。それから、平日と日中だけですから、夜間とかも出かけないとも限らないということですので、あと、休日ですね。その体制をどうするかというと、やっぱり消防とか民間にお任せするとか、いろんなことがあるかと思いますんで、それらも含めて検討したいと思います。

なお、現在、市のほうでも、健康増進事業で健康手帳というのをかなり高齢者の方、お持ちです。これは全部、情報を書いてありますんで。自宅じゃなくて、出かけるときは、その健康手帳を持っていただくということを基本にしてるようなので、それらもあわせれば完璧なのかなというふうに思っております。

○大道寺　信委員長　３番、江口忠博委員。

○３番　江口忠博委員　ありがとうございます。

大田区とは工業、経済とか産業の分野での連携ということも、今、一生懸命やってらっしゃるわけですけども、ぜひこういった市民サービスの分野においても、さまざまな情報交換をしながら、足りないところも確かにあると思います。こういう場合、どうすんだ、ああいう場合、どうすんだということもあると思いますが、それは長井で独自にとられる対策があれば、いろいろ、先ほどの話でも、医療機関なども連携してもらって、長井なんかはできる余地があるんだろうななんていうこともちょっと考えたりもしますので、さまざまなアイデアをこれから市内外からも募りながら、ぜひ政策のほうに生かしていただければということをお願い申し上げて、質問を終わります。ありがとうございました。

町田義昭委員の総括質疑

○大道寺　信委員長　次に、順位２番、議席番号10番、町田義昭委員。

○１０番　町田義昭委員　よろしくお願いします。

時間的にそんなにかからないような質問内容でございますので、ちょっと感じたこと、思ったことを最初に申し上げたいなと思います。

６月議会の折かあるいは３月議会の折に、ことしは楽しみなことがあるんですというようなことを申し上げた記憶がございます。それは、昨年度、道照寺平スキー場に梅津議員のいい種子をいただいたコスモスが、若干ではありましたけれども成育したというようなことで、その種がこぼれて、ことしは大きくにぎやかに成長するんじゃないかなという期待感を持ってこの半年ですか、過ごしてきたんでありますけれども、13日の土曜日、平野小学校の運動会の後にちょっと見に行きましたけれども、残念な結果というようなことで、非常に厳しいもんだなというふうに思いました。

ヒュッテの南のほうの平らなところには大分成長しておったんですけれども、それでも30本ぐらいかなと、そんなように思いました。そして、一番見てほしい、見てくれというようなところの第１リフトのところに、去年は結構咲いたんですけども、ことしは一輪もなかったというようなことで、別に除草剤散布のせいにしているんではないんですけども、やはり土壌が岩だらけだというふうなことで、なかなかああいうものは成育しないのかなと、非常に残念だなというふうなことで、再度挑戦をするなんていう気には今のところなっておらないんですけども、これから何かの形であそこをまた少し考えていきたいなって、そんなふうに思っているところでございます。

きょうの気温は、半袖では本当に寒いような状態でありまして、私も議員になって、９月の議会がこんなに適温で過ごされるというような環境は一度もありませんでした。いいのか悪いのか私はわかりませんけども、ことし長井市の議会に合った天候になってくれたのかなと、そんなように今、思っております。

テーマといたしましては、フラワー長井線の利用拡大の成果についてというようなことを取り上げさせていただきました。

第三セクターになって、フラワー長井線が今まで行政並びに市民の方々の協力によってここまで経過してきたということに対して敬意を表するわけでございます。とりわけ私的に考えますと、目黒市政までのフラワー長井線の利用拡大というものは、どちらかというと消極的な利用拡大政策というものであったのではないかなと、そういうふうに理解しております。そして、内谷市政になって積極的な利用拡大の施策に方